

安原史紀氏

株式会社ヤスハラ 代表取締役

鮮やかな色とりどりのタオルに欠かせないのが染料である。1922年創業の（株）ヤスハラは、染料の卸・加工をはじめとする総合化学メーカーであり、現在、3代目として経営の舵取りをしているのが今回の「タオルびと」の安原史紀氏である。

社内に色を調合するラボ（研究室）を備え、どんな色のオーダーでもつねに対応できる体制を整えている。同社の「Color



安原史紀氏

Matching（色の調合・色の再現性）」の技術は卓越しており、今治の染色加工業者から厚い信頼を得ている。

愛媛県繊維染色工業組合が2018年からとり組んでいる「IMABARI Color Show」の「1000色の世界」にも技術提供するなど、「色」を操る技で活躍の場を広げている。




やすはら・ふみのり ☆ 1944年10月、今治市常盤町生まれ。1922年創業の染料・工業薬品の卸業者の長男として誕生。今治市立美須賀小学校を卒業し、今治市立日吉中学校に入学。その後、愛媛県立今治西高等学校を経て日本大学商学部商業科に入学。1967年に帰郷して（株）安原商店に入社、川之江営業所に配属となる。染料に関する知識を独学でマスターし、また製造現場や取引先などで修業を重ねることで営業マンとして会社の発展に寄与。35歳で実質の経営を任され、それ以来時代の変化に応じて「範囲の経済」を活かしながら事業を多角化。現在は繊維用・製紙用染料の卸・加工・製造のみならず環境関連資材の施工など幅広く事業を展開する。

1. 幼少・青年時代

「跡取り長男」として刷り込まれた幼少時代

安原史紀氏は、1944年10月13日に今治市常盤町で、2代つづく染料メーカーの長男として生まれた。現在「いまばり銀座」通りにある「テキスタイル・ウダカ」が立地している場所が、安原家の今治での出発点である。安原氏は、姉と妹に挟まれて順番としては二番目の子供であったが、安原家にとって唯一の男の子だったため、「跡取り長男」としての期待は生まれたときから高かった。

安原氏は、1951年4月に今治市立今治小学校に入学し、自宅が引っ越した関係で途中から今治市立美須賀小学校に転校した。その後、今治市立日吉中学校に通った。小学校から中学校の多感な時期に、母親のマサエ氏から「跡取り長男」の役目について とつとつ と話を聞かされていたため、幼少時代にもっとも印象に残っているのは、いま振り返っても安原氏に込められた母親の期待の言葉である。

そうしたなかで、子供らしく嬉しかった思い出として、中学校1年生のときに新品のカメラを買ってもらったことである。手に入れたカメラは、当時流行していたマミヤ  製の35ミリのカメラだった。あまりにも興奮して、記念すべき最初に撮影する一枚を一週間かけて考え、いろいろアイディアを練った。


迷った挙句に安原氏が選んだのは、蒼社川の土手に天日干しされた色とりどりのタオルだった。1950年代の今治では、タオル製造がすでに地域の主要産業に成長していたが、当時の染晒加工はすべて手作業でおこなわれ、タオル用原糸や生地を乾燥させる工程は天日干しによっておこなわれた。川の土手に天日干しされた色鮮やかな かせいと 総糸やタオル生地は今治の名物であり、その光景は多くの人を魅了した。以前「タオルびと」でとり上げた木下ソーイング会長の木下正男氏もそのひとりであった（「タオルびと」2019年4月号～7月号参照）。

安原氏は、蒼社川沿いに本社を構える東洋繊維協同組合の目の前の土手に自慢のカメラを持って撮影に出かけた。ちょうどその場所が総糸の干し場になっていたからである。残念ながら、当時撮影した写真もネガも残っていないが、少年時代の思い出として唯一鮮明に覚えている楽しい出来事であった。



（参考）蒼社川の川縁で天日干しされた総糸（1966年4月撮影）


カメラに熱中した中学時代をへて、1960年4月に愛媛県立今治西高等学校に入学し、高校までの18年間を今治で過ごした。高校卒業を機に、「将来は跡取りの身だから、好きなことをやろう」と東京行きを決めた安原氏は、1963年4月に日本大学商学部商業学科に入学した。花の都・東京に上京した安原氏は、日本大学商学部のキャンパスがある世田谷区祖師谷の周辺ではなく、そこから電車で約1時間弱ほど離れている渋谷区恵比寿を生活の拠点に選んだ。

恵比寿は六本木や赤坂にも近く、東京の中心部にある。恵比寿と言えば、「エビスビール」にその名前の由来がある。1887年に（有）日本麦酒醸造会社 （現在のサッポロビール）が設立され、同社の工場が建設された。その工場では1890年に生産・販売されたのが「エビスビール」である。エビスビールは好評を博し、1901年には工場の貨物駅が「恵比寿停車場」と名付けられた。それ以降、周

辺の地域も恵比寿と名付けられ発展していった。そして、いまでも洒落たレストランやカフェ、ホテルなどが建ち並ぶ流行発信地のひとつであり、老若男女問わず人気のエリアである。

いまでこそ白状するが、安原氏の頭のなかは「上京＝自由」であり、「何をして遊ぼう」を優先に住むところを選んだ。幼少の頃より「跡取り長男」として教育を受けてきた重圧からの解放もあり、自分探しの旅でもあり、複雑な気持ちを抱えていたものの、安原氏は、有言実行と言わんばかりに、恵比寿を拠点として「好きなこと」に没頭した。

とくに熱を上げたのはビリヤードである。ビリヤードにはいくつかの種類があるが、安原氏は三つ玉を得意とした。センスの良さが発揮され、いつときはプロを目指そうとおもったほどの腕前であった。パチンコにも興味を持って集中的に店に通ったり、アルバイトをしたりしたが、こちらはあるタイミングでピタリと止めた。

ビリヤードやパチンコが若者に人気の娯楽となった1960年代の日本は、高度経済成長期にあり、人びとの所得水準の上昇とともにレジャーの大衆化が進んだ。さらに、1960年代後半になると首都圏を中心に道路交通網などのインフラ  が急ピッチで整備された。そのおもな要因は、1964年に東京で開催された東京オリンピックである。

安原氏は、変わりゆく東京の風景を目の当たりにして、またそのライブ感を共有できたことは貴重な経験だった言う。新宿駅や池袋駅に行くたびに、新しいビルが次から次へと建設され、首都高速の開通で高架形式の道路が頭上に縦横無尽に建設され、日に日にすっかり景観を変えていった様子は圧巻だった。戦後復興をへて、日本全体が活力に溢れていた時代である。

東京オリンピック開催前後の東京と同じように、安原氏が20代に日本の躍動感を直に感じる場所が他にもうひとつある。それは大阪である。安原氏が帰郷後に（株）ヤスハラに入社し、研修に訪れた大阪では大阪万博が開催予定であり、日に日に変わっ

ていくエネルギッシュな大阪の街を見ながら、そのパワーを肌で感じた。いま振り返ると、東京オリンピックと大阪万博をとおして日本がもっとも元気だった時代をその場で体験できたことは、人生においてプラスとなった。

1964年東京オリンピック大会閉会式（左）

（出典：「朝日新聞」1964年10月25日朝刊1面）



1970年大阪万博開会式（右）

（写真提供：万博記念公園 <https://www.expo70-park.jp/>）



「ヨーロッパ行き」の言葉に乗せられて帰郷

1967年3月に日本大学商学部を卒業後、今治に帰る気はさらさらなく、小さな抵抗として2年ほど東京で働いた。「やっぱり都会は自分にとって魅力だったんですね。田舎にはないものがたくさんあって、働いたら働いただけの対価がきちんと返ってきますし、遊びもできますしね。楽しかったですよ」と、安原氏は当時を振り返る。

しかし、父親の一言で転機が訪れる。父親から「ヨーロッパに行かせてやる」と言われ、安原氏は今治に帰郷することになった。洋行への憧れは少年の頃からあった。きっかけは、安原商店の取引先で懇意にしていた東洋繊維協同組合代表の田中良太氏からしばしば

洋行話を聞くたびに、そして洋行土産をもらうたびに、いつの日か憧れを抱くようになっていた（田中良太氏については「タオルびと」2016年12月～2017年3月を参照）。

その「ヨーロッパ行き」は、実は安原氏を実家に戻すための口実だったことを帰郷後に知った安原氏であったが、「時はすでにおそし」であり、家業を継ぐために安原商店に入社した。（次号につづく）

